

第56話 (32頁) ネコ

お百姓のところにネズミがふえました。お百姓は家にネコをつれてきて、ネズミをとらせようと思いましたが、ネコは自分がりっぱになるためにつれてこられたのだと思いました。そこで、ネコはほねを食べ、ミルクを飲んで、ぷっくり、つやつやになりました。そして、もうネズミをとらなくなりました。

ネコはこう思ったのです。

「やせて、毛がパサパサのうちは、おいだされるのがこわかったけど、今では毛もつやつやときれいになったから、お百姓がわたしをおいだすことはないだろう。べつのネコをわたしのようにするのは、手間がかかるもの。」

ところが、お百姓はネコがネズミをとらないのを見ると、おくさんにこう言いました。

「うちのネコは役立たずだ。やせたネコをさがしておいで。」

お百姓は太ったネコをつかまえると、森にもって行って、すててしまいました。

「ネコが大いなる勘違いをした、というお話だね。」

「うん。主人である百姓の意図が読めなかった。ぷっくり、毛がつやつや、きれい。主人の願い通り、そんな『りっぱな』ネコに変身したので、主人も気に入ってくれるに違いないと思っただ。」

「ところが、どっこい、そうじゃなかった。主人はただただネコにはネズミを捕ってほしかった。だから、役立たずのネコめ、と悪態をつき、森に捨てちゃった。」

「この時代、ネコには家畜のように役に立ってもらいたかったのか、あるいは、現代のペットのように、かわいくて心を癒してくれればよかったのか。このネコは、勝手に自分はペットだと早合点したんだね。」

「もっとあとの時代に生まれてくればよかったのに…」(笑い)

「お百姓だって、違った意味の勘違いをしていたのでは？ 連れてきたときは、もっとやせていたのに、骨やミルクといったごちそうをいっぱい与えている。そうすれば、ネコは感謝してネズミを追いかけると思ったのかな。」

「ネコって、そもそも気まぐれで頑固で多分に自己中心的と言われている。犬には忠誠心があるのと対照的にみられているよ。」

「ネコにもいろんな見方がある。マザーグースにはバイオリンを弾くネコが出てくるし、英国などのクリスマスカードでは、幸せをもたらすとして黒猫が定番だ。」

「ネコの瞳は光の量によって大きさが変化するので、月の満ち欠け、死と再生に例えられた。死を司る面が強調されて、中世ヨーロッパでは魔女の使いと思われた。」

「なるほどね。ところで、お百姓を神、猫を人間と見立ててみたらどうだろうか。」

「自分の生きる目的をしっかりと見極めることが、どんなに大事か。それを神は人に気付かせようとした。」

「見栄えとか所属とか評判とか、そういった外見に左右されず、この世に自分の生きる意味をひたすら見つめ直す大切さを説いた、ということか。」

「うーん。話が哲学的になってきた。そこまで読み込むと奥が深い。」